

第4回なら・未来創造基金助成と、
日野自動車グリーンファンド平成18年度助成による

2007 年度 景観ボランティア明日香
明日香村上居(じょうご)地区
聞き取り調査報告



2008. 10. 30

景観ボランティア明日香

目次

1. 上居の暮らしと風習聞き取り調査のきっかけ	2 ページ
2. 調査実施日にご協力いただいた皆さん	2 ページ
3. 聞き取り調査担当者	3 ページ
4. 伝統的な行事と村の暮らし	3 ページ
1月	3 ページ
2、3、4月	4 ページ
5、6、7、8月	5 ページ
9、10月	6 ページ
11、12月	8 ページ
5. 農業の話	8 ページ
○今はしなくなった農作業	8 ページ
○牛とともに ○戦後の苦労話 ○戦争中の話 ○副業の話	9 ページ
6. その他	10 ページ
○遊び ○庚申さん	10 ページ
○結婚式・出産 ○上居のお墓 ○お葬式	
○講 (①五重講、②尼講、③伊勢講、④旧講、新講)	11 ページ
○上居の役員 ○水の話	12 ページ
○上宮寺と聖徳太子 ○上居や農業に対する思い	13 ページ
7. 今様のお祭り -また皆でいっしょにやろうよ-	14 ページ
○秋祭り	14 ページ
○ごくづき	15 ページ
○さなぶり	17 ページ
8. ボランティアの皆さんへ	18 ページ
9. 聞き取り調査を終えて	19 ページ

1. 上居の暮らしと風習聞き取り調査のきっかけ

景観ボランティア明日香の、2006、2007年度の歴史的景観保全活動の作業地である明日香村上居（じょうご）地区は、聖徳太子がお生まれになったところという言い伝えがあり、さらに上宮寺もあって、聖徳太子に縁がある、由緒深いところです。

全世帯数19（うち1戸は不在）というこじんまりとした静かなたたずまいのこの地区も、今や他の地区と同じく少子高齢化が進み、お年寄りが多く、若い人たちや子どもが少ない人口構成になってしまいました。

このままでは、10年もすれば上居の伝承や文化が消えてしまうかもしれないと、上居地区総代の山本欽司さんから聞き、私たちは、上居地区の歴史的景観を保存することと同様、歴史的由緒のある上居の伝承や文化も保存すべきだと考えました。そこで、地元の皆さんに上居の昔の話をうかがって、文章の形にして残そうということになりました。

ヒアリング調査は、第4回なら・未来創造基金助成と、日野自動車グリーンファンド平成18年度助成によって、2007年7月23・24日の2日間を中心に行い、山本総代と地区の皆さんのご協力で18世帯すべての方々に、子どものころの思い出とともに上居の行事や村の暮らしをたくさんうかがうことができました。

この調査の結果を、現在は行われていない風習などもよくご存知の70歳以上の方のお話を中心にして、項目ごとにまとめました。

2. 調査実施日とご協力いただいた皆さん

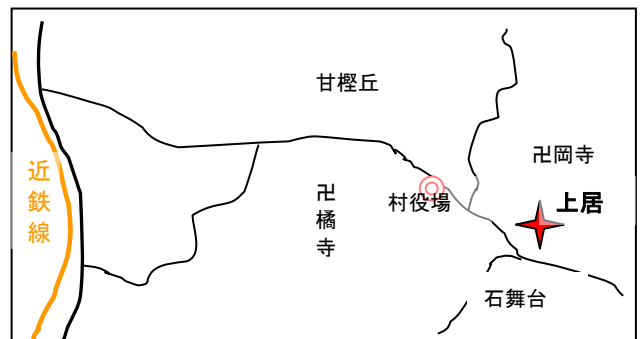
1) 聞き取り調査

- 日時 2007年7月23日(土)～24日(日)
- 上宮寺集会所（7/23） 午後2時～4時・春日神社拝殿（7/24） 午後3時～4時半頃
- ご協力いただいた方々 上居地区18世帯の皆さん

杵田憲雄さん(59歳) 橋本清次さん(52歳)
藤本忠史さん(74歳)

山本八十男さん(62歳) 中野好通さん(57歳) 内田善府さん(83歳)
岩本岩男さん(72歳) 谷口憲一さん(60歳) 藤本光一郎さん(61歳)
山本欽司さん(67歳) 藤本正茂さん(67歳) 内田善八さん(57歳)

地区内女性の方々8名



2) 行事見学

(1) 秋祭り

- 日時 2007年10月16日(日)
- ご協力いただいた方々 上居地区18世帯の皆さん

(2) ごくづき

- 日時 2007年12月16日(日)



- ご協力いただいた方々 上居地区18世帯の皆さん
(3) さなぶり
- 日時 2008年6月29日(日)
- ご協力いただいた方々 上居地区18世帯の皆さん

3. 聞き取り調査担当者

- 聞き手 景観ボランティア明日香運営委員
2007/7/23 小野山義之助 佐々木孝子 加藤英雄 久門雅臣 三木健二 中島伸昌
7/24 清水正一郎 奥田一彦 新開高尾 長尾輝治 佐々木孝子 加藤英雄
久門雅臣 山本尚武 三木健二 中島伸昌
- 行事見学
2007/10/16 長尾輝治 佐々木孝子
2007/12/16 長尾輝治 佐々木孝子
2008/6/29 奥田一彦 佐々木孝子

○聞き取りは3班に分かれて実施、録音した内容を各調査員が文章にし、全データを佐々木孝子運営委員が項目ごとに整理、編集し、報告書にまとめた。

4. 伝統的な行事と村の暮らし

1月 お正月の門松は、神さんに早く降りてきてもらうために、なるべく高いところにつけました。特に若水を汲むことはなく、井戸水を使います。かまどの火は、ママガラを入れて男の人がつける決まりでした。神さんが下がってくるので、女性よりも男性なのかもしれませんが、毎朝かまどを焚きつける母親に、お正月はゆっくり寝てもらおうということだったような気がします。

お雑煮のお餅は丸餅で、焼いていれます。白味噌で味つけ、具は大根、人参、芋くらいです。

三が日は、昔は何段もあるお重でした。豆、高野豆腐、ごぼう、レンコン、慈姑(くわい)は必ずあって、鯛はする家としない家がありました。山の中ですからね。

そのかわり、エイを使うのです。カレイくらいの大きさのエイで、行商の人が売りに来ていました。“大和のええ(エイ)正月”としゃれて言ったものです。

母親が、エイの肝で炊いてくれたおからはおいしかったです。今はもう食べる機会がなくなっていました。エイもないし、おからも昔と違って油気がなくなるまで絞るから味がない。第一、豆が違います。昔はこの辺の土手で作った大豆を使っていました。そういえば、味噌も各家で作っていましたね。

1月6日には、五重講を受けた人たちが「ムロクさん」をします。そもそもは、藤原鎌足の霊を祀る行事とも聞きましたが、ほんとうのことはわかりません。暮れについてお餅のうち、形のよいお餅を6個上宮寺に納めに行きます。お寺ではお餅のお祓いをして、そのあとお雑煮にしてふるまったり、お寺でいただいたりします。6個のうち、1個をいただいて帰り、家族で焼いて食べます。2、3個だった

かもしれません。

この時にもらうハゴウサンは、4月の苗代の時に、サツキやヤマブキの花と、スジノコのお箸と一緒に田の角に立てて、苗が無事に育つよう願います。

ハゴウサンというのは、おっさん（和尚さん）がムロクさんの判をついた半紙（写真）に穴を開けて、コヨリでネコヤナギの枝に結んだものです。判には、「上宮寺上高院」とあったようです。また、ネコヤナギは、根が張り、沢山芽がでるため縁起がよいとされました。



1月14日は「トンド焼き（“ドンド”とも）」で、家の神さんの大掃除のようなものです。お正月に使ったしめ縄やお札、子どもの書初めに紙で作った花、春日神社の門松などを、集めてきた竹と一緒に燃やします。

この火を家に持って帰って神棚にお灯明を灯し、15日にはそれで小豆粥を炊きました。これを、スジノコのお箸で食べます。スジノコは、穂のついたススキで、長さが50センチくらいあって振ると穂が落ちたものです。カイバシラ（切り餅）もとんどで焼いて食べました。

また、ビワやツバキの葉を裏返しにして米や小豆（または小豆粥）、カイバシラを乗せて家の周りや神棚、田んぼ、畑、山などに置いてまわり、豊作や安全を祈願しました。春日神社、上宮寺、大神宮さん（上宮寺境内）にも供えたり、または自分の家の墓に限って供える家もありました。

今は子どもが少なくなって、大人が集まりやすいように1月の第2日曜と日を決めて、田んぼでしめ縄や竹を燃やして火を持って帰るだけになりました。小豆粥も、神社やお寺にお供えすることはなくなりました。

1月から2月の、麦の出始めのころには、餅つきででたお餅のはしくれを「鳥にやっといで」と言われて田んぼに蒔きにいったことがあります。その頃は、学校から帰ると、牛の餌にする草を刈りに行っていました。

2月 2月3日は「節分」で、ゴマ（炒り大豆）をまいて、寺や神社にお参りをします。年の数だけゴマを食べるとよいと言われました。ゴマは神棚にも供え、鯛を食べるのも恒例になっていました。鯛の頭は、ヒイラギに刺して玄関や鬼門の方向に置きました。

3月 岡寺で「初午」、「二の午」、「三の午」がありました。昔は、岡寺では女19歳・男25歳が厄、松尾寺では女33歳・男42歳が厄とされ、厄をよけるよう、岡寺に参る坂道には厄除けかんざしや、ゆでたカワガニを売る屋台などがたくさんありました。今でも、岡寺は厄除けのお寺として知られ、特に初午の時はけっこうな人出になります。

ヨモギ餅をついて食べるのもこの頃です。

4月 4月1日が花祭りで、お釈迦さんに甘茶をかけます。



岡寺山門

4月10日の「こんぴらさん」は、今のお花見みたいなものです。上居の山の上の、見晴らしがいちばん良いところに、「金毘羅」と石に刻んで祀ってあり、そこに家族で登って幕を張り、バラ寿司やなにやかやのごちそうを食べます。おとなの人たちはお酒も飲みます。太鼓やラッパや、旗を持って行って遊びました。22, 23年くらい前まではやっていました。

石に刻まれていたのは「金毘羅宮」という字だったともいいますが、今は草が茂って近づけなくなってしまい、わかりません。あの頃はほんとうに見晴らしがよかったけれど、まわりの木も大きくなって、大和平野も見えなくなってしまいました。

5月 苗代をつくる時に、飛鳥坐神社が御田祭りの田植え行事に使う松の小枝を、半紙で巻いて苗の形にしたものを貰って、ハゴウサンと一緒に、苗代の水口に安全と豊作を祈願して供えます。

5月5日の子どもの日には、柏餅をつくりました。粽（ちまき）も、本当は萱草でつくと聞いていましたが、萱草がないので同じように柏の葉で巻いてつくっていました。

6月 5月の、麦の収穫から田植えまではとても忙しいので、手伝いのために、小学校、中学校も1週間から10日程度休校になりました。私たちはこれを農繁休暇と言っていました。

田植えが終わると、春日神社で「さなぶり」があります。飛鳥坐神社の宮司さんに“米があんじょうできるよう”「みのたき」で祈祷してもらうものです。「みのたき」というのは、釜をたいて湯をわかし、宮司さんがそこに米と酒をいれて笹でまぜ、その笹でお祓いをする儀式です。

さなぶりが終わると、皆で寄ってお酒を飲んだりお菓子を食べたりします。これは今もやっています。



7月 7月2日は半夏生休みで、田植えが終わったあとのからだ休めです。家によっては小麦餅をつくっていました。小麦粉に餅米を少し混ぜて、きな粉をつけて食べます。おひつに入れておけば2, 3日はもち、「土用のはらわた餅」とか「さなぶり餅」、「半夏生餅」とも言いました。土用に向かって、力をつけようというわけです。昔は、白飯を食べる機会はあまりなくて、その代わりでもないが、お餅は何かとよく食べたものです。

田植えが終わる頃には、トマトやナスやキュウリができます。おばあさんに「がたろにやっといで」と言われて、初物を川に流しにいったりしました。「がたろ」は河太郎と書いて、かっぱのことです。

7月7日は七夕で、8日には子どもたちが作ったお飾りを川に流しに行きましたが、今はありません。

「地蔵盆」が7月23日にあったと思います。上宮寺に大人も子どもも皆集まって、おっさんを中心に数珠くりをしました。子どもはお土産をもらう決まりでした。それから、昔は、盆踊りが毎年石舞台のところでありました。

8月 「お盆」は一年の内でいちばん大きな行事で、絶対に家をあけることはできません。

10日は、岡の藍染織館のある通りで「十日市」がたつ日で、蓮の葉やおみなえし、こやまきなどお盆に飾るものなどを買に行きました。昭和40年代まではありましたね。

13日は上宮寺へお墓参りに行きます。十日市で買ったお花を挿し、ナス・キュウリ、トマト、マクワウリなど夏にとれたお野菜を蓮の葉にのせてお供えします。お迎えに線香をたきますが、線香の束に火をつけて、煙をたなびかせながら持って帰り、ご先祖様をお迎えする家もありました。

14日は、お寺さんが檀家をまわります。お昼はご飯・おつゆ・煮物・香の物などで椀物（お膳）を用意し、午後3時ごろにあんこをいれた「どさくさ餅」を作ります。夜は素麺くらいです。

15日は、ご先祖様を送る日で、もうお盆も終わりで家にいます。送る前に大きなスイカを一つ割る家もあります。線香をたいてお迎えと同じように煙で送る家もあれば、ご先祖様が帰るためにお弁当（握り飯）をつくり、お供えのお下がりや花と一緒に、藁でつくった松明の火でご先祖様を送っていく家もありました。今は、松明は使われないようです。各家によって、どこまで送っていくかが決まっています。



当屋で保管されている「椀物」一式

8月19日は「風日待ち」で、台風が来ないことを祈願します。31日は「八朔」で、豊作を願うものです。どちらも田植えと稲刈りの間の息抜きで、お弁当をつかって、上宮寺に集まって飲み食いを楽しみます。

昔は、それぞれの家でドブロクを作っていて、集会の時には皆で飲んだものです。こたつの横に置いて発酵させるんです。一軒で一升瓶に5本から6本、多い家では10本ほども甕で作っていました。

口当たりがいいし、でき始めは米のジュースのようなものですから、子どもでもよく飲んでいました。

八朔（はっさく）は、今は、子どもたちとの時間を持てるように、31日前後の日曜日になっています。2つの拝殿の間の通路に板を渡して、皆が座れるようにするのは昔のままです。

9月 昭和15、6年ころまでは、9月1日に「こおりとり（お水とりとも）」がありました。朝早くに、椿の葉を一枚ずつちぎって、取り水をしているところまで行って浸し、神社に上って納めることを33回繰り返します。水が枯れないように祈願するのです。一人だと33回でたいへんですが、何人かいるとその分、楽です。これは村総出の行事でした。

また、飲み水を取り水する家（6～7軒）の集まりがありました。大谷の水路に7個の穴のあいた四角形の石を置き、各家に分かれて流れるようにしてありました。水道ですね。



10月 16日と17日が春日神社の「秋祭り（神嘗祭）」です。一年の内の、「当屋」の最後のお勤めとなります。

まず、15日に神主さんが特大の御幣（約1.5m：写真）で各家の竈を清め、月当番がみのたきをして、沸いたお湯にいった笹でお払いをします。昔は午前中で旧講をまわり、午後には新講を一軒ずつまわるので一日がかりでしたが、今は当屋の家だけになっています。

16日は、神主さんが旧講の当屋につめて「仮宮の神事」をします。当屋は、ブリ、煮物（小芋、椎茸、高野豆腐、牛蒡など）、蒟蒻の白和えなどの椀物を用意し、お餅をついて講の人たちに振舞います。神主さんにも、お祓いのあと食事をして帰っていただきます。講中と神主さんの分の椀物を用意するのはたいへんでしたが、これも今は簡素化されました。



三宝には、旧講と新講で違うものを供えます。旧講は、主に川や海のもので、お神酒のほかに、塩、水、米（写真左）、鯛、生きた鯉（写真右上）の5種類を個々に三宝にのせます。生きた鯉を使うのは、（明日香村で）上居地区だけです。暴れないようにお酒を飲ませ、目に紙で覆いをしますが、大抵、それから2時間くらいは生きていますね。



新講では、山や野のものを供えます。「立て御膳」といい、野菜を盛った三宝と、果物の三宝と、稲穂の3品を用意します。野菜は、芋茎を立てて枝豆と椎茸を沿わせて昆布でまいたり（写真右下）、芋頭と芋

の子に大根、人参、枝豆、を水引でまとめたり、当屋により多少違うようです。果物は、ザクロ、柿、みかんなどです。3品とも、子孫繁栄を願う意味があります。

それから、宮送りをします。行列の先頭には、当屋を始めとして3人が烏帽子を被り、羽織袴を身に着けて立ちます。1番目が御幣と扇を奉げた当屋で、2番目はしめ縄、3番目は御幣と扇に笹2本、藁1束を持ちます。その後ろに講の主だった人たちが、「ごいのごいのごい」と言いながら続きます。これは、もともとは、「御幣と御幣が会うてわあい」と言ったそうで、旧講、新講それぞれの当屋から行列が出て、道の途中で出会い、いっしょに春日神社に向かうのです。



講中は神社でお神酒をいただき、持参したお重もいただきます。その晩は「よみや」で、境内はとても賑やかでした。



秋祭りの時には、「太鼓台（御輿）」もでていました。ケヤキ造りの立派なふとん太鼓で、台の上に人を乗せて、青年団が20人から30人で神社まで担ぎ上げ、行列と同じように宮送りをするのです。17日にもふとん太鼓をくりだして、周りの村にちょっかいをかけに行き、力自慢もしました。

太鼓は、ケヤキをくりぬいたもので、円周1間（約1.8m）ほどもあります（写真）。皮の縁に、大阪の「太鼓正」で昭和32年に張り替えたとき書き込みがありますから、古いものです。昭和19年が、太鼓を担いでまわった最後の年でした。

太鼓台は、昭和25、6年ごろに担ぎ手がいなくなって途絶えてしまい、春日神社

の拝殿にしまわれたままです。拝殿は扉も鍵もなく開け放しで、飾り物などはいつのまにか盗まれてなくなってしまいました。

お祭に続いて18日にしていた運動会も今はなくなりました。小さい時は、運動会で賞としてもらえるノートや鉛筆がとても嬉しかったものです。

17日には、当屋が、仮宮、衣装、提灯、椀物など講の持ち物一切を次の年の当屋に手渡して、当屋の一年の勤めを終えます。

11月 稲刈りが終わると、「亥の子」があります。何日だったかは忘れてしまいました。ぼた餅を作って、仏壇に供えます。甘いものは神棚には供えません。

12月 16日に「ごくづき」をします。上居ができたころからある古い伝統行事で、もともとは、春日大社の「おんまつり」を上居でもやっていたということです。でも、昭和の始めごろにはすでに今のような形になっていて、特に宗教的な意味はなくなっていました。

上宮寺の境内にある「大神宮さん」は、伊勢の大神さんで、伊勢参りの代わりに行くところです。各家でもち米を2、3合ずつ持ち寄って、大神宮さんの前で2臼ついてお鏡を2つ作り、大神宮さんと春日神社に供えます。お神酒を供えてお参りをしたら、すぐに、皆で焼いたり、餡（あん）つけにしたりしていただきます。



大神宮さんの燈籠

かなり前から餅つき機でやっていましたが、去年(平成18年)に木臼が寄贈されて、昔ながらの餅つきに戻りました。

17日は「おんまつり」です。上居の春日神社は春日大社の系統なので、このお祭りは大切です。当屋の一年が、このおんまつりから始まるのです。講ごとに、子どもも大人も、当屋に紋付羽織袴で集まって、午後2時ごろからお呼ばれをします。言ってみれば、忘年会のようなものでもあります。

大晦日には、春日神社、上宮寺、庚申さん、大神さんの門松を飾りつけます。

5. 農業の話

○ 今はしなくなった農作業

米と麦の二毛作で、田んぼは1年中フル稼働でした。みかんと芋は自給していて、炭焼きもかなり盛んでした。村の行事は、農作業に合わせて行われていたのです。

昭和30年ごろまでは麦を米の裏作に作っていて、1月は麦ふみの時期でした。今は自家用に作っているものを手入れするくらいで、特に決まった作業はありません。

2月になると、土の手入れをします。植えておいたヒガンバナを刈って、土と混ぜて発酵させ、そこにサツマイモの種芋を植えます。春にかかって、芋の芽がでたら、麦の間に挿していきます。4月ごろの仕事です。5月の田植え前が丁度麦の収穫の時期で、麦刈りが終わると、芋が具合よく伸びているというあんばいです。

7月の中ごろに田植えが終わると、トマトやナス、キュウリなどの夏野菜ができています。

11月の末、稲刈りを終えたら、そこを耕して麦を植えます。12月は牛に鋤かせて、土寄せをします。

○ 牛とともに

牛は農作業になくなくてはならないものでした。生活も牛が中心で、各家の玄関脇が牛小屋でした。夕食も、まず牛が先で、その後、人が食事をしました。小学校1年の時に、親父に牛を連れて家に帰るように言われた時も、怖いとも何とも思いませんでした。ですから、牛肉を食べることはなく、年を取ると交換するのです。他には、乳をとるために山羊と、お祭りや、お客さんが来た時のごちそう用に鶏を飼っていました。戦中・戦後は、買い出しに来た人に卵を売ったりもしました。

○ 戦争中の話

山の中ですから、魚が買えるのはお金持ちの家だけですが、「金があっても魚が買えない」と言われたのが戦争中です。腹に、米1升を巻きつけて伊勢に魚を買いにいったこともあります。戦後に、大阪の闇市で食べたイカの丸焼きのおいしさは忘れられません。

猫も杓子も出征しました。32、3歳でも行ったんですよ。作った米は、兵隊さんのためというので全部供出でした。

17歳で、特攻隊で死んだ友だちもいます。平和な時代はほんとうにいいです。

○ 戦後の苦労話

戦後は、お上の命令で、食糧として麦やキビ、芋、大豆、じゃが芋などを作りました。また、米は、保有米（1石1～3斗/人・年）分以上、作った量の6割から7割は供出しなければなりませんでしたが、上居は地形や水の条件が厳しく、供出は苦しいものでした。

水田の生産力が等級化されて出来高が換算され、そこから供出量が決められたために、保有米が確保できない家も多くありました。保有米を残すために、麦や豆を混ぜて食べ、米3分・麦7分のご飯は当たり前で、お弁当に米飯を持っていったりと怒られました。

生活のためにヤミで米を売ったこともあります。サツマイモ粥はよく食べました。蜂の子もよく食べさせられましたね。

配給の時代には、服や靴も乏しく、サツマイモなど、作ったものを町へ持って行って物々交換もしました。わらぞうりをゴムぞうりと換えた思い出もあります。

米の供出は昭和30年代前半まで続きましたが、生活は昭和25、26年ごろから、急になくなったように思います。

○ 副業の話

地形が急で水田が少なく、それだけでは生活が苦しかったこともあり、戦前までは養蚕業が盛んでした。桑畑がたくさんあって、ほとんどの家で、春と秋の年2回、幼虫からマユまでの飼育をしていました。現金収入になったので、当時百円札も見たことがあります。でも、昭和20年代には終わっていたようです。

その後は、ゴヒツ、シャクヤク、バラなどの薬草栽培をした時期もあります。これも今はありませんが、「関漢方薬」（関さん宅でつくる漢方薬）としてわずかに引き継がれています。林業は、農作業の合間に山に行く程度でした。炭焼きもしていて、小遣い稼ぎにはなりました。

柿畑は大正時代くらいからあり、上居で持っているのは現在5軒くらいです。でも、一山全部が柿畑で、それも人手がないとなかなか収入にはなりません。

山手にある上居は、もともと農産物の生産量が少ない地区でした。平地が少ないため機械も入れにくく、人手も少ないので、今後とも農業だけでやっていくのは難しそうです。

専業農家は、上居では1軒だけです。あとは兼業なので、農作業や村の仕事は土日に限定されて、農業は自分の家で食べるだけにするしかありません。明日香村全体で収入を得るような基盤作りが必要なのですが.....。

6. その他

○ 遊び

遊びというと、上宮寺の境内によく集まって遊んだものです。男の子は独楽回しやべったん、かっちゃん（釘立て）、はちまわり、たたきばい、ビー玉、缶けりなど、凧揚げもしました。女の子はおはじきやお手玉や、縄跳び、まりつき、ゴムとびなどでした。たたきばいというのは、コマまわしのようなものです。

山の中ですから、木はいくらでもあります。直径10センチくらいの木の切れ端を拾ってきて、コマにするのですが、自分で作るので、芯がありません。それをひもで叩いて、上手に動かすのです。

上居のお墓はいちばん高いところにあって見晴らしがよく、怖いという感じは全くありませんでした。ヒガンバナの葉をお尻に敷いて土手を滑り降りたり、雪が積もると竹ぞりで遊んだりしたこともあります。



平尾池

あの頃は、今石舞台の駐車場になっているところに高市小学校（高市郡高市村立）があり、学校の帰りには、毎日のように石舞台に上って遊びました。石舞台の上には大きな石が2つ屋根のように並べてありますが、その上を跳び越したりしたものです。

夏は、冬野川で遊びました。昔は今よりも水の量が豊富でしたが、それでも泳ぐというよりは浸かる、といった感じでした。上居橋の下の方に淵があつて、少しでも水深をかせぐために藁や石を積んで堰にしていました。「はいじゃこ」という魚をよく捕りました。上居の上の方にある平尾池にも泳ぎに行きました。大人たちには「池に近づくと、がたろに引っ張られるぞ」と脅かされていました。

○ 庚申さん

旧暦で4年に一回来るうるう年の4月に、上宮寺の境内にある庚申さんのお祭りをしていました。

それから、暦に記載があり、奇数月にもしていました。2か月に一回、各家から米を集めて赤飯を炊いて祀り、お神酒をいただきながら食べます。おかずは持ち寄りでした。今は食べるのはなくなって、形だけ残っています。

1月は特に、初庚申と言います。家により、仏事と神道のどちらかで行われます。仏事では、ネンネノキ(ネムノキ)の枝を削り、そこにおっさん（和尚さん）が仏の言葉を書いて、門口に立てかけておきます。

神道では、神主さんが御幣を使い、祝詞をあげます。

○ 結婚式・出産

結婚式の時には、新郎側が大字（集落）の各家に紅白饅頭を配りました。赤ちゃんが生

まれた時にも、紅白饅頭を配ります。19世帯で親戚が多く、何かあると協力しあっています。

○ 上居のお墓

上居のお墓は、字の中でいちばんいいところにあります。見晴らしがとてもいいのです。ここから見渡すと、向かって左から、金剛山、葛城山、二上山、いちばん右端が生駒山です。全部一度に見えるんですよ。

このお墓のすぐ下のところは、昔、貴族が初めて火葬にされた場所といわれています。

お墓は、上段、中段、下段と3段になっています。これは昔、県議会の副議長（故人）だった人が、自分の畑を一枚つぶして作ったものです。上が90円、中が60円、下が30円で、それをくじ引きであてました。



上のお墓は、もともとお墓があったところでもあるので「古墓（ふるばか）」、真ん中のを「中墓（ちゅうばか）」、いちばん下の新しいところを「新墓（しんばか）」と呼びます。

昔は土葬でした。この墓石の下に、おやじもおふくろもほんとうに並んで寝ているんです。両親がここにちゃんといるんだなあと、いつも思います。

今は、もちろん火葬です。

○ お葬式

大字（集落）でお葬式がある日は、その大字の子どもだけ小学校の授業は午前中で終わり、午後はお葬式にでなければなりません。例えば、上居でお葬式があると、「本日、上居でお葬式がありますので、上居の児童は帰りなさい」と校内放送があり、上居の子どもだけが忌引きとなります。

帰るとすぐにお葬式のある家に行き、一緒に炊き込みご飯のお昼をいただきます。お葬式は亡くなった人の自宅であり、祝戸地区と兼務している檀家寺からお坊さんが来て引導を渡します。お坊さんがお経をあげてから、遺族と大字の人皆で葬列を組んで、上宮寺まで送ります。その時、小学生は、幟や提灯を持って葬列の先頭を歩きました。上宮寺の前で、最後のお別れの読経があげられてから、お墓に土葬されるのです。

小学生がお葬式に参加する風習は昭和30年代までありました。小学生を参加させるのは、亡くなった人を送る厳粛な儀式を体験させるためでありましたが、なぜそのような決まりになったかはよくわかりません。土葬の風習は、昭和50年代の初めまで残っていました。

○ 講…上居にはいろいろな講があります。

① 五重講

浄土宗で、信者が仏門に帰依する行事で、受講希望者を募り、方々のお坊さんに来てもらって5日間の講を開き、生前に戒名と袈裟をいただくのが五重講です。受講する前に亡くなられてしまった場合は、後で戒名をいただくので「送り五重」と言いました。

説教の資格を持つ偉い法主さんと、その世話をするおっさん（僧侶）4、5人が上宮寺に来られますが、法主さんに約100万円、おっさんの分が一人一日5万円ほどで全部で200万円くらいかかるので、20人から30人くらい集まらないと、負担が大変です。昭和53

年を最後に、五重講は開かれていません。

でも、2、3年前から、また五重講をしようと計画しています。実は、去年（平成19年）にしようと準備していたのですが、上宮皇院の大おっさんが（注：祝戸の専称寺兼務）が95歳で亡くなられてしまいました。息子さんが修行中で、まだその資格がないので手配できなかったのです。機会を待って、復活させようと思っています。

② 尼講

お年寄り（女性）が檀家寺のお坊さんを導師に迎えて、上宮寺でお経をあげます。これは、檀家寺の行事がない時にあって、今も続いています。今では、お経をあげるほかに、月当番の代わりにお宮さんのお掃除もするようになりました。

③ 伊勢講

当屋を中心に、お伊勢参りをする講です。昔は1年に5回も行きましたが、今は1年に1回です。

④ 旧講・新講

春日神社のお祭りの講です。集落がいつ頃からあったかはわかりませんが、200年くらいは住んでいるでしょう。岡から分かれてはじめて集落を作った8軒が旧講で、後に入った5軒が新講です。新講のあとにはいった家は、どちらにも属しません。

お祭りを仕切る「当屋」は、旧講はくじ引きで決めます。神主さんが2センチ角の紙に各家の苗字を書いて丸めたものをコヨリで吊り下げて引きます。当屋をこのようにして決めるのは上居だけです。

新講では、当屋は順番に回していきます。当屋は、お祭りで使う一切のもの（衣装、提灯、提灯台、椀物）のほか、山など講の財産すべてを一年間預かります。

○ 上居の役員

18世帯中、総代（1人）、評議員（5人）のほかに農地員など、大字の約半数は何らかの役についています。番ちょうは奉納番で、木の札を何日かおきにまわして宮さん参りをします。月当番は大字の御用聞きのようなもので、宮のお掃除や、配り物を配達します。

○ 水の話

丘の上にある上居では、水を確保することはとても重要です。上居の上の方にはいくつかのため池があります。平尾池は、もともと小さな池だったのを、広げて雨水を溜められるようにしたものです。

水不足の時には、水を管理する「時水（ときみず）」という制度があります。5~6年前にも実際に行われました。水を冬野川から引いて川の両側に2本の水路を作り、水を反当り2時間の割合で均等に分水するものです。上居では、谷の南側に田がたくさんあり、石舞台のあたりまで給水していました。冬野川の水で足りない時は、平尾池からも水を取りました。

それから、春日神社の谷筋から水を取り、節を抜いて筒状にした太い竹を繋ぎ合わせて水道管を作って、約300m下流の上宮寺の近くまで引いて水槽に溜めて各家に給水しました。この竹水道は年に2回取り替えられていましたが、最近はゴムホースに変わっています。

○ 上宮寺と聖徳太子

上宮寺は、正式には上宮皇院といいます。こんなに小さな字で、“宮”（上宮皇院）を持っているのです。維持管理は上居でやっています。過去に2回ほど火事で焼けた時も、誰に頼ることもなく、村にあるものを売ったりして自分たちでやってきたのではないかと思います。

以前には細川字も檀家だったといえますし、上宮皇院は、もとは、もっと大きな立派なものだったのではないのでしょうか。

というのは、ここには、聖徳太子が少年時代に、上宮寺から谷の向こうの花畑というところまで馬に乗って往復した、との言い伝えがあるのです。花畑のほかにも、大白台とか、堂庭などの地名があります。

その木を切るとバチがあたると言われている場所もあります。

上居は高台にあって、橘寺や稲渕、阪田の寺、板葺宮まで全てが見渡せます。そんなところに、ふつうの人が住めたでしょうか。



上居寺のご本尊

誰か、位の高い人が住んでいたのではないのでしょうか。遺跡も何もないので想像にすぎませんが、昔は、上居からその上の平尾まで、平らな高台だったのかもしれない。それなら、聖徳太子が馬で往復したのもうなづけます。

○上居や農業に対する思い

昭和20~30年の戦後経済成長で、社会が変わり、村の生活や習慣もすっかり変わりました。ずっと続いていた習慣や行事がなくなったり変わったりして、昔のことを知っているのは60歳代半ば以降の人になってしまいました。学校に、農繁休暇があったなんて、今の50歳代は知りません。

村には、長男は残りますが、次男以下は出て行ったきり戻らず、人が減って、お祭りなどの行事を続けるのも難しくなりました。それで、旧講と新講を合体して、集落全体で行事やお祭りをを行うようにしたのです。できるところから形にしてみようと思っています。

今は、上居全体の50%は荒廃しています。屋敷跡、畑、田んぼ、みかん山は藪や竹林に覆われているのです。明日香村の人口は毎年40~50人は減っていて、上居では子どもは二人しかいません。戸数は現在19軒ですが、20年たったら、半分になっているでしょう。

全国で300の集落が消えているんですよ。上居も、全国に1000ある集落消滅予備軍の一つです。外から来てもらおうにも、法律があるので、明日香の人間でなければ家を建てたり、農地を買ったりできないのです。

どうにかして、また皆がひとつにまとまったらいいなと思います。何事も一気にはいきません。旧講と新講をいっしょにしたり、字全体で行事やお祭りをするようにしたり、できるところから形にしていこうとしています。

強制はいけません。「来られへん」と言われたら、「ああそうか、ほなまた次に頼むわな」と気持ちよく言う。そうしたら、次に都合があった時には来てくれます。会社でも何でもいっしょです。上手に皆がつきあっていく、というか・・・そうですね、何でもゆっくりしていくのがいいのです。

いろいろ、したいことがあります。上居は、王寺の方からもよく見えるんです。まっすぐに、ほんまによく見えますよ。だからこうして、山桜の木を植えたりして、ちょっとずつでもきれいにしていきたいんですわ。

上居の上の方には、今はもう誰も使わなくなった古い畑道があるんです。もう埋もれてしまってるけど、これをきれいに掘りだして整備して、散歩道みたいにしたと思うてます。そうして、きれいなどこにしたら、観光客も来るかもわかりません。

長いことかかりますけどね。できるうちは、少しずつでも、できることからやっていかなあかんなあと思います。

7. 今様のお祭り —また皆でいっしょにやろうよ—

○ 秋祭り

今は 16、17 日前後の週末を秋祭りにあてるようになり、去年(平成 18 年)からは、旧講と新講で別々にしていたお祭をいっしょに、お供えもいちどきにするようになりました。

今年(平成 19 年)は、10 月 20 日(土)が秋祭りでした。上宮寺のすぐ下に新しい集会所ができたので、そこを仮宮にし、初めて皆で揃いの法被(はっぴ)も作りました。

日頃は皆仕事がありますから、お祭りに必要な一切をそろえるところから始めます。朝からかかって、一日仕事ですね。

朝 8 時ごろからもち米を蒸し始め、上宮寺の座敷を掃除して境内にテントを張ります。畑から野菜や果物を取ってきて、お供えの準備をします。当屋の家から、三宝や瓶子の箱を集会所に運び込む人や、去年使った行灯(あんどん)の紙を張り替える人たちもいます。内輪のことですし、皆で手分けしてぼちぼちやるんですわ。

古い太鼓も境内に引き出して、子どもたちに好きに叩かせてやります。古いといっても、まだまだいい音がでますから、若いおとうさんやおかあさんたちもいっしょになって遊んでいたりします。



9 時すぎに集会所に宮司さんが来て、当屋の当主といっしょに御幣を作ります。どこの字も秋祭りはこの週末なので、各字をまわる、飛鳥坐神社のたったひとりの宮司さんは大変です。この頃は、土曜日でも人数が揃わない字があり、今年は土曜日にお祭りをしたのは上居だけでした。

御幣ができあがり、祭壇の飾りつけがすんだら、「仮宮の神事」をします。これにあずかるのは当屋と、主だった大人たちだけです。仮宮のお祓いのあと、宮司さんはいったん帰り、上宮寺の境内では餅つきが始まります。

木臼(きうす)にあつあつのもち米があげられると、子どもたちも集まってきました。

50 年物の木臼(きうす)です。これでお餅をつくのは一年に一度で、久しぶりの重い杵に、始めは少々手間取ったものの、だんだんとのってきて、今年は 3 升 1 臼で、4 臼つきました。

お昼は、一昨年までは各家ですます習慣でしたが、去年からは仕出し弁当にして、皆でいっしょにいただいています。

お昼がすむと、今度は「宮送りの神事」の準備を始めます。午前中に作っておいた三宝や立て御膳を仮宮に供えて、当屋は羽織袴に着替えます(写真次頁)。





宮送りの前座とも言うべき「餅まき」は今年初めての趣向です。お餅の中にはくじがはっていて、羽織袴の当屋が盛大に餅をまくと、大人も子どもも大はしゃぎ！空くじはなしで、皆一つずつ景品があたります。あちこちに、景品を見せ合う輪ができて、わいわいとにぎやかです。欲しい物がもらえなかったとベソをかく子どもがいるかと思うと、ちゃっかり取りかえっこをしているグループもありました。

宮司さんが改めてやってきて、全員が集会所に集まると、いよいよ「宮送りの神事」の始まりです。鯉にお神酒を飲ませて目を半紙で覆っておくのは昔のしきたりどおりです。三宝にのせられた鯉が、本当にごくごくとお神酒を飲むのには、子どもたちはもちろん、大人も目を丸くしました。宮司さんが仮宮で祝詞をあげたあと、これもしきたり通りに行列を作り、先頭の当屋が扇を高々とさしあげて「ごいのごいのごい、もひとつ祝うてごいのごいのごい」と言うのに皆で唱和して、春日神社まで上がっていきます。峠のところと、神社の前でもう一度ずつ、同じように景気をつけます。

お供えを本殿に供え、みのたきをします。わかした釜の湯に宮司さんが酒を注ぎ、祝詞をあげて、湯に浸した笹でお祓いをして、もう一度祝詞をあげて、二拝二拍手一拝で締めで終わりです。



最後に、宮司さんのお話があります。今年のお話はこんな風でした。

「皆が心を一にするのは難しいことですが、ただ今の、二拝二拍手一拝はきれいにそろっていました。すばらしいことだと思いました。

こうして集まって、秋のお祭りを皆で祝えるのはとても嬉しいことです。役員さんたちの肝いり

で皆がだんだんと一つになってきたのではないかと思います。

神を祀ってきた昔からの村の中で、自分の生活をしながら、皆が健康で食べられ、幸せで、だんらんがどの家にも来るようにと願います。」



○ ごくづき

今年（平成 19 年）の「ごくづき」は 12 月 16 日（日）でした。どんな字をあてるのかよくわかりませんが、「穀づき」ではないでしょうか（注：明日香村史によると、正しくは「御供づき」とある）。5、6 年前までは、もち米を 1 軒ごとに 5 合だすのが決まりでした。もち米を作っていない家は小豆を 2 合だします。農業でない家はお金をだして、砂糖などはお金で買っていました。今は、これらの材料は寄付とか、村で買っています。

昔は明日香村全体で 12 月 16 日と決まっていたのですが、最近はずによって違うようです。春日大社の「おんまつり」（12 月 17 日）に準じてやっているのは上居だけです。

「ごくづき」には各家から大人一人がでることになっていて、子どもは参加しません。

別に男性と決まってはいませんが、何となく一家の当主が
でるような形になっています。家の中で暇なのはおとうさん
ということではないでしょうか。

さて、これも一日仕事です。朝 8 時ごろから、前の
晩に洗っておいたもち米を蒸し始め、上宮寺の境内でとん
どをたきます。寒いし、夕方までもたすので大きなとんど
です。竹もよく燃えるのでどんどんくべます。



生竹だと勢いよくはぜて、爆竹のような音がしておもしろいのです。竹が火にあたる角
度を工夫したり、なるべく太い竹を切ってきてくべて、「ボン！」と大きな音がすれば大成
功。おとうさんたちが思わず歓声をあげて、「いい年してなあ〜」とお互いに笑いあう内
にからだも暖まって、華やいだ雰囲気になってきました。

大神宮さんと春日神社に供える鏡餅は、最初の 1 臼で作るのが決まりです。お鏡が 2 組
できたら、神さんの分は終わりなので気が楽になります。

以前は大神宮さんの燈籠の前で 2 臼ついていましたが、今は餅つき機です。この餅つき
機は、それでももう 30 年以上使っているものです。改めて思うと、ずいぶん前から臼では
つかなくなっているんですね。



餅つき機は、ほっといたらできあがりますから楽なものです。
でも、機械で作るともち米の水分や熱がとばないので、杵つき
よりも仕上がりが軟らかく、おまけに熱くて丸めにくいんです。
ほら、もう手が真っ赤になりました。ほんま熱いですわあ。

今年は寄付で、もち米がいつもよりたくさん来ました。昼ま
でに終わらんというので、臼もだしたくらいです。2 升 1 臼で、
5、6 臼ついたでしょうか。緑米の餅米です。これはおいしいですよ！

春日神社には、手のあいた人がお鏡とお神酒を持って行って、ちょっと拝んで、すぐに
また持って降ります（写真上）。大神宮さんには、皆でお供え
してかしわ手を打って、これもすぐに下げます。昔は宮司さん
を呼んで祝詞をあげてもらっていたかもしれませんが、今はわ
かりません。



お参りがすんだら、お雑煮をつくります。お汁は、もち米を
蒸したお湯を残しておいて、ここに畑から抜いてきた大根を輪
切りにして放りこみ、味噌をとき入れるだけです（写真右上）。できたばかりのお餅を火鉢
でどンドン焼いて、お皿に山盛りにしておき、お汁も釜ごとだします。てんでにお椀に味
噌汁をよそい、お餅を好きなだけいれて、お雑煮にするのです。お餅は、餡つけや磯辺ま
きにもします。



お酒もでて、お昼から夕方ごろまで、皆でわいわいと、
まあ言うたら一年の反省会のつもりですわ。できあいの
お雑煮を食べてゆっくりしてってください、という訳
です。

「ごくづき」は今では、以前のように来た人だけで
細々とするのではなく、村全体の行事です。小さな字でも、

こういう時でないとなかなか皆が顔をあわせることがありません。伝統行事ですし、他の字ではあまりやっていると聞かないので、若い人にもでてほしいものです。

お正月のお餅は、「ごくづき」とは別に、各家でつきます。ふつうは、29日は「苦がつく」ので避けて、28日までにつきます。といっても、最近の若者や子どもはあまりお餅を食べませんから、どこの家でもつくということはないでしょう。昔は何かというと、お餅をついたし、一人で5個も6個も食べたものでしたが・・・。

○ さなぶり

去年は（平成19年）は6月23日（日）、今年（平成20年）は6月29日（日）で、決まった日取りはありません。田植えの時期は6月半ばから7月10日くらいまでなので、字で田植えが終わる頃を見計らって、皆で寄って決めます。

ふだんは仕事があるので、日曜日でないと集まれないでしょう。宮司さんの都合も聞かんらんしねえ。春日神社の系列の字は皆やりますから、宮司さんもこの時期たいへんです。とはいえ、この頃は人が減って、宮司さんと呼ばずに内々でするところもあるようです。

儀式といっても、小さいものです。だいたい2時ごろからで、それくらいに集まってや、と言っておくと、ほんまに皆2時ごろに来りますわ。

1時半くらいから、来た者でぼちぼちとお供えの準備を始めます。まず必要なのは、お祓い用の笹の束と竹2本。これは御幣をはさむので、割っておきます。宮司さんが座るためのわらの束もいります（写真右）。どれも、誰かが適当に竹林や納屋から取ってきます。



「みのたき」の設え

本殿のお供えは、季節の野菜が5品、果物が3品くらいで、たりないものはスーパーへ行って買ってきます。



塩、洗い米、酒、乾物（高野豆腐、するめなど）はどのお祭りにも欠かせないものです。

稲穂のお供えは、田植えが終わった時分ですから、ないです。豊作を祈るんやから、苗というのも変ですしね。昔はあったのかもしれませんが、わかりません。

そうこうする内に、気づいた者が、春日神社に行って、釜を焚きつけ、「みのたき」の準備を始めます。古新聞や木切れを使って、薪に火をつけます（写真上）。薪も、この頃は手に入らんようになりました。お風呂もガスやし、ひつついさん（かまど）もなくなりましたから、山の木を切っても処理できない、置いておくところもあります。野焼きも消防法で規制されているんです。今回の薪は、まだお風呂を薪でたいている人が持ってきてくれました。

さて、皆が春日神社に集まったころ、宮司さんが「暑いな～」と汗をふきふき神社の階段をあがってきました。がやがやとにぎやかだった一座も、宮司さんが御幣を作り始めるとしんと静まります。そうしてできあがった御幣を本殿にたてかけ、わらの座を少し整えて正座をして、「みのたき」の始まりです。



沸き立った湯に、米と酒を入れて笹の葉で混ぜます（写真左）。その笹で一同にお祓いをしてもらいます。そのあと、祝詞をあげて、本殿のお祓いもし、最後に全員で二拝二拍手一拝でお参りをします。宮司さんが本殿からお供えのお酒をさげて、終わりです。

宮司さんが帰られたあとは、そのまま皆でお神酒を頂いたり、お菓子を食べたりします。もともとは、田植えのあとの休養というか、慰労を兼ねていたんでしょうなあ。昔はこんな風が集まった時に相談事などもしていましたが、今はないですね。

今は、村のイベントや、草刈りなど字の作業予定の伝達なんかをして、ひとしきりおしゃべりをして、適当に解散になります。

3年くらい前に、旧講と新講をいっしょにするまでは、さなぶりも3人、5人で細々とやっていました。もうほとんど、なくなりかけていたんです。そやから、儀式のことも、昔は決まりがあったかと思うけども、もうわからんねえ。

まあ、むずかしいことをしても続かないので、そこらへんのもんで、神さんが納得すれば・・・いやあ、我（わが）が納得できればいいんです。こうして、今年も、皆で寄れた、とね。



春日神社本殿

8. ボランティアの皆さんへ

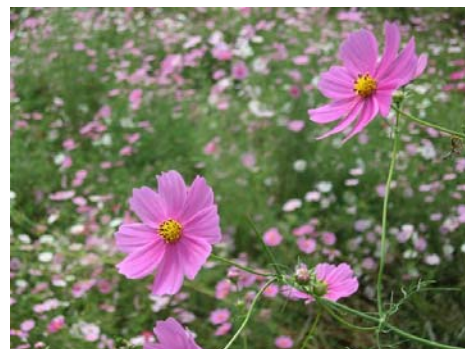
ボランティアに来てくれると言っても、どんな人かわかりません。一回限りのお遊びで、それっきりかもわからへん、初めは正直言ってもものすごく不安でした。

でも、こうして何回も顔を見せてくれはって、ああこの人たちは本気で来てくれたはるんやなと思いました。すごく嬉しいです。

実は、村の人たちも、ボランティアの人たちが何回も来て作業してくれたことで、“私らの村はええとこなんや”と思うようになって、みんなが少～しずつ、まとまってきたような気がします。

ボランティアの人たちの手はどうしても必要です。ボランティアの人の手を借りて、そんで村の人と一緒にやって、ちょっとずつ上居をきれいにしていきたいです。

「ほんま、これからもよろしゅう、お願いします。」



9. 聞き取り調査を終えて

お話を伺っていて意外だったのは、70歳くらいを境に、覚えている生活の様子が全く違うことです。70歳以下の世代では、古いしきたりや暮らしぶりをよくご存知の方は殆どいらっしゃいませんでした。

大抵の方たちは既に専業農家ではなく、郊外に住む私たちと同じように通勤し、同じ生活感覚をお持ちでした。電車でも車でも、1時間かからずに大阪市内に行けるのですから、考えてみれば当たり前のことです。

それでも、行事ごとに皆が集まり、また何かと助け合うような、人と人の濃いつながりはまだまだ健在です。中には、「昔話をするのはいいが、私が言ったとほかの人にわかると困ります」と言う方もいらっしゃいました。近所づきあいの薄い、郊外の住宅地に住む者には、それが却って新鮮で、自然な感情に思えたものです。

ボランティア活動の参加者も含め、景観ボランティア明日香には、明日香村に生まれて育った人はいません。今回、昔話のほかに、明日香村や上居地区に対する思いや少子高齢化の問題、ボランティアへの要望なども伺ったことは、“よそ者”の私たちがここで何をするのか、すべきなのか、改めて考える機会ともなりました。

私たちが旨としている「地元との協働」がひとりよがりにならないよう、常に原点に帰って、明日香村の人たちとのおつきあいをゆっくりと続けていきたいと思えます。

(佐々木孝子)

歴史的景観を守るボランティア作業をするときだけ、地元の人と一緒に作業するだけで果たして、明日香の人たちと交流したといえるのだろうか？

やはり暮らしや風習まで踏み込んで理解していないと、本当の交流にはならないし、歴史的景観の理解も表面的なものになるのではないか。そんな思いから、上居地区の聞き取り調査をしました。私たちの団体は、景観保全作業だけでなく、調査・研究活動も目的にしており、今回の調査がその活動の記念すべき第1号です。

社会地理学が専門の佐々木運営委員を除くと、こうした調査は初めてのおじさんばかりで、果たしてうまくいくかどうか大いに不安がありました。一読してもらえばわかりますが、明日香での暮らし、風習をとどめるかなり密度の高い内容になったのは、地元のみなさんに快く協力していただいたこと、さらに、なら・未来創造基金、日野自動車グリーンファンドから助成金が得られたおかげです。

この調査を通じて、明日香のみなさんの暮らしの歴史、風習の変遷、地域社会のつながりなどがはっきり見えてきました。このささやかな冊子が、日本人のこころのふるさとである明日香の暮らしと風習をしっかりと未来へつたえるメッセージなることを願ってやみません。**(三木健二)**

定価 300 円

2008 年 10 月 30 日

〒634-0112 奈良県高市郡明日香村島庄 154-3

(財)明日香村地域振興公社内

景観ボランティア明日香 発行

(会長 三木 健二)

TEL 0744-54-9200 FAX 0744-54-5118

E-mail : asuka@yume9200.jp